

小さいから できる

南富良野高の挑戦

昨年10月31日、町立南富良野高でハロウィンイベントが開かれた。生徒会執行部が企画し、生徒や教員がメイドや魔法使いなどの仮装をして授業を行った。放課後の「パーティー」では町内の小学生らが来校して宝探しゲームを楽しみ、お菓子を手渡された。子ども2人と参加した近所のパート従業員山下夕美さん(35)は「最近、高校でのイベントが増えた。高校生が頑張っていて応援したくなる」と笑顔をみせた。

同高は授業の一環で開催する講演会なども町民に無料公開する。昨年11月、旭川市旭山動物園の坂東元園長の講演会では町民約50人も来場し、盛況だった。保護者以外に開放することで高校を文化やスポーツの拠点にする狙いがある。

イベント開催など地域交流の流れは前校長の能登啓貞さ

㊥ 町民の学びや



仮装した南富良野高生(左)からお菓子をもらう子どもら(同高提供)

学校開放文化の拠点に

ん(58)＝現札幌丘珠高校長＝がつくった。新入学生が3人まで落ち込んだ2021年4月に赴任した能登さんは交流

サイト(SNS)の発信なども強化。学校存続には、町民の理解が不可欠だったからだ。「高校の活動を知ってもら

らうことで(学校設定科目の)アウトドアの授業や部活動などで協力してくれる人が増えた」と振り返る。

一方、町は同高の教育支援や教員の人件費などに年間平均1億5千万円を予算計上している。教科書購入費やアウトドアの授業に必要な体験料やガイドの報酬、富良野市など町外から通う生徒の通学費などに当てている。

同高と町の目標達成に向けた方策の一つが小中高の連携強化だ。昨年12月、「町異校種交流会」を初めて開いた。児童生徒に南富良野の課題や将来を考えてもらうだけでなく、地元の高校を身近に感じてもらい、進学先として意識してもらおう機会にしようという企画。町内の小中高3校の児童会や生徒会役員が町づくり

こうした取り組みは、生徒が町内の会社や人と協働する機会を増やした。例えば、3年生は授業の一環で食品加工製造「南富フーズ」提供のシカ肉を使ってハンバーグを揚げた創作料理などを開発した。ほかに地元のニンジンでジャムを作り飲食店で販売したり、スキー場でイベントを開催したりと活動の幅を広げる。今秋には飲食物販売や吹奏楽部の演奏会を同高で行う「感謝祭」を全生徒が携わる形で開く予定だ。

目指すは高校生だけではなく、町民みんなの学びやだ。町教委の鈴木誠教育長は「町内外に高校の応援団を地道に増やしていきたい。『高校の魅力化』を続けていけばきつと今以上に町民が集う場所になるはず」と未来像を描く。

町教委によると、町内唯一

(相武大輝)